

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 第 号
------	-------

氏 名 韓 涛

論文題目

中国語の概念メタファーに関する研究

— 認知メタファー理論の立場から —

論文審査担当者

主 査	名古屋大学准教授	丸尾誠
委 員	名古屋大学教授	柳沢民雄
委 員	名古屋大学教授	尾関修治
委 員	名古屋大学准教授	勝川裕子

別紙 1-2 論文審査の結果の要旨

本研究は、認知メタファー理論の立場から、現代中国語における概念メタファーの諸相について考察したものである。理論的・実践的な側面から分析を試みると同時に、日本語と英語との対照を通して、日中英三言語に反映された異なる思考様式や行動パターンにも焦点を当てつつ、議論が展開されている。以下、論文の概要と評価について述べる。

[本論文の概要]

本論文は序章、終章を除いて、全 8 章から成る。

第 1 章では、本研究における理論的前提である認知メタファー理論の基本的な考え方が示されたうえで、当該理論を理解する際に必要不可欠な項目として、①「起点領域と目標領域」、②「存在的対応関係と認知的対応関係」、③「概念メタファーとメタファー表現」、④「概念メタファーの性質」、⑤「メタファーのネットワークと継承」の 5 つが論じられている。これらは本研究のキーワードとなるもので、以降の各章における分析の際に援用されている。

第 2 章では「メタファーの基盤」が考察の対象として取り上げられている。Lakoff and Johnson 1980 以降対立する 2 つの立場、すなわち Grady 1997 ほかに代表されるメタファーの基盤として共起性しか認めないものと、鍋島 2002 ほかに代表される共起性を含む複数の基盤を認めるものそれぞれに焦点を当てて、どちらの主張がより合理的であるかという問題について、中国語の〈怒り〉のメタファー、〈水〉のメタファー、〈善悪〉のメタファーに関する分析を通して検証されている。分析の結果、中国語における〈怒り〉のメタファーの中心を構成する《怒りは火》と《怒りは気》は、いずれも共起性という基盤に基づいていることを明らかにしている。この検証結果から、メタファーの基盤を説明するのに (i) 共起性、(ii) 構造的性、(iii) 評価性の 3 つを設定する必要性について述べ、この結論は鍋島 2002 ほかの側の主張の妥当性を裏づけるものであるとしている。

第 2 章同様、第 3 章でもメタファーの理論的側面に焦点が置かれ、中国語の〈火〉を起点領域とするメタファーの諸性質について、具体的には①メタファーのスコープ、②メタファーの意味焦点、③メタファーの中心的写像の 3 つが考察されている。

続く第 4 章から第 8 章までは、中国語の概念メタファーに関する事例研究である。

第 4 章では概念メタファーの根源性の 1 つの現れとして、〈空間〉のメタファーが取り上げられている。具体的には、「〈上下〉に代表される方向性をもつ〈空間〉」と「〈容器〉に代表される境界線をもつ〈空間〉」の 2 つに分けて論じられている。〈上下〉のメタファーについては方向補語“～起来”と“～下(来/去)”の用法、例えば“明亮起来”[明るくなる]、“暗下去”[暗くなる]といった表現の成り立ちに着目し、〈上〉を表す“～起来”が“正向”[プラス]形容詞と共起し、〈下〉を表す“～下(来/去)”が“負向”[マイナス]形容詞と共起する動機づけの解明を試みている。

あわせて、〈容器〉のメタファーをめぐって、〈容器〉のイメージ・スキーマとそこから得られる複数の推論を明らかにしたうえで、中国語において〈容器〉がいかに概念形成に関与し

別紙 1-2 論文審査の結果の要旨

ているかについて、《身体部位は抽象物を入れる容器》というメタファーが取り上げられている。

第 5 章では中国語の〈名誉・不名誉〉および〈恋愛〉という 2 つの〈感情〉の概念化について、メタファーが概念形成にいかに関与しているかという側面から考察が行われている。中国語話者が有している〈名誉・不名誉〉という〈感情〉に関する理解は、主に〈顔〉という概念に基づいている（例：“丢脸” [恥をかく]、“脸皮厚” [ずうずうしい]）。第 5 章前半部では、この〈顔〉がどういった概念を介してメタファー的に理解されるのかについて、〈名誉・不名誉〉のメタファー体系が、①〈容器〉のメタファー、②〈所有物〉のメタファー、③〈事象構造〉のメタファー、④〈評価性〉のメタファーの 4 つに分類されたうえで、個別に分析が加えられている。また、各メタファーの起点領域が〈名誉・不名誉〉のみを特徴づける固有のものであるか否かという問題を取り上げ、第 1 章でみた「メタファーのネットワークと継承」の観点からも検討されている。その結果、当該起点領域はいずれも〈名誉・不名誉〉の上位概念に適用されるメタファーの起点領域を継承したものであることが解明されている。

次に第 5 章後半部では、〈恋愛〉という〈感情〉に焦点を当てて、中国語話者が〈恋愛〉という概念について理解し語る際に、どのような起点領域が用いられるのかについて考察が行われている。考察の結果、①〈熱〉のメタファー（例：“炽热的爱情” [熱烈な恋]）、②〈火〉のメタファー（例：“点燃爱情” [愛を燃やす]）、③〈電磁気〉のメタファー（例：“放电” [色目を使う]）、④〈脆いもの〉のメタファー（例：“爱情是易碎品” [愛は割れやすいものである]）、⑤〈食べもの〉のメタファー（例：“爱情也有保鲜期” [恋にも賞味期限がある]）、⑥〈移動物〉のメタファー（例：“爱说来就来说走就走” [愛は来るのも去るのも早い]）、⑦〈植物〉のメタファー（例：“收获爱情” [愛を収穫する]）、⑧〈旅〉のメタファー（例：“漫漫情路” [長い愛の道のり]）、⑨〈戦争〉のメタファー（例：“爱情的俘虏” [恋の虜]）という 9 つの区分を立てている。さらに、起点領域と目標領域にみられる様々なメタファー写像についても提示したうえで、各起点領域と目標領域を結ぶものは何であるかというメタファーの基盤についての問題も視野に入れて議論が展開されている。その結果、上記 9 つのメタファーは共起性基盤、構造的基盤、評価性基盤の 3 つに分類できることを明らかにしている。

第 6 章では中国語における〈思考〉のメタファーが取り上げられている。〈思考〉という概念は、第 5 章でみた〈感情〉と同様に抽象的なものである。しかし〈感情〉については、例えば〈名誉・不名誉〉や〈恋愛〉などの〈感情〉が生じる際に、特定の生理的反応が観察できるのに対し、同様のことが〈思考〉という概念には認められない。そのため、〈思考〉については〈感情〉にみられる場合よりも、さらに抽象化がすすんでいるといえる。第 6 章ではこの抽象的概念について、具体的に (i) 中国語話者が〈思考〉について語る際にどのようなメタファーを用いるか、(ii) これらのメタファーの基盤は何であるかという 2 つの問題についてそれぞれ考察が行われている。

さらに各メタファーの基盤の問題に着目して、当該メタファーが「共起性基盤、構造的基盤、評価性基盤」のいずれかに分類できることが示されている。〈知覚〉(6.4.2) と〈対象物

別紙 1 - 2 論文審査の結果の要旨

操作) (6.4.3) のメタファー基盤は知覚や対象物を操作する際に、様々な情報も同時に手に入るという意味で共起性のものであると考えられる。そして、〈性質〉のメタファー (6.3.1)、〈力〉のメタファー (6.3.2)、〈植物〉のメタファー (6.3.3)、〈液体〉のメタファー (6.3.5)、〈火〉のメタファー (6.3.6)、〈移動〉のメタファー (6.4.1)、〈食べること〉のメタファー (6.4.4) などについては、例えば〈力〉と〈考え〉の間から〈力〉のイメージ・スキーマを、また、〈植物〉〈移動〉と〈考え〉の間からは〈線と移動〉のイメージ・スキーマをそれぞれ抽出することができるという意味で、いずれも構造性を基盤にもつメタファーであると考えられる。これらに対し、6.3.4 で検討されている〈食べもの〉のメタファー基盤については評価性のものであるとしている。

第 7 章と第 8 章では対照研究の手法を用いて、中国語における概念メタファーの解明が試みられている。

第 7 章では日本語および英語との比較を通して、中国語における〈コミュニケーション〉のメタファーについて考察されている。英語では〈言葉〉は〈個体〉として概念化され、話し手 (あるいは書き手) と聞き手 (あるいは読み手) におけるコミュニケーションは〈個体化〉された〈言葉〉のやりとり、具体的には〈意味〉を〈言葉〉に入れた後、〈導管〉を通して相手に送ることを通して行われる。これに対して、日本語では〈言葉〉は〈液体〉として概念化され、〈コミュニケーション〉という概念は液体表現を通して行われる。そして、中国語話者がもっている〈コミュニケーション〉に関する通俗的な理解は英語または日本語のどちらとも一致せず、中国語独自のものであると主張している。それはすなわち、話し手と聞き手の間で行われる言葉のやりとりが、身体という容器の間における移動として通俗的に理解されるというものである。また、日中両言語に関していえば、日本語の場合、〈話し手〉と〈聞き手〉の間でやりとりされる〈言葉〉が《身体部位は容器》というメタファーから独立して〈流動体〉として概念化されうるという点で、中国語の場合とは大きく異なる。その要因として、《身体部位は容器》というメタファーが中国語では日本語以上に深く根ざしており、概念形成に積極的に関与しているという点が挙げられる。

第 8 章では日中対照の観点から、Nomura 1996 で日本語の《言葉は流動体》のメタファーを考察する際に提案されている (i) 言葉の産出は流動体を発すること、(ii) 言葉の流暢さは流動体の流れの速度、(iii) 言葉の理解しやすさは流動体の透明度、(iv) 言葉を受け入れることは流動体を受け入れることの 4 つのサブメタファーを分析の枠組みとして、考察が行われている。その結果、これらのサブメタファーが中国語において 1 つの通俗的な理解を構成しているとは言い難いと結論づけている。むしろ中国語では〈言葉〉を概念化する際に〈流動体〉のメタファーではなく、〈容器〉のメタファーが積極的に関与していると考えられ、この結論は第 7 章で導き出した結論と一致するものであると述べている。そのうえで〈言葉〉が〈流動体〉という抽象度の低いレベルで概念化される日本語に対して、中国語では〈言葉〉が〈容器〉—〈内容物〉というより抽象的なレベルで概念化されているとまとめている。

別紙 1-2 論文審査の結果の要旨

[本論文の評価]

本論文は大きく分けて2つの部分から構成される。第1部(第1~3章)は「理論研究」である。従来、英語(および、それに続く日本語)を中心に行われてきたメタファー研究を概観したうえで、各種理論を中国語に適用した場合の妥当性を検証する意義が記されている。続く第2部(第4~8章)は、認知メタファー理論の立場から、英語・日本語との対照を交えつつ、中国語のメタファーに関する個別の概念が分析された「事例研究」である。この部分は本論の中核となる部分であり、豊富な具体例を用いて、実証的に検証が行われている。論文全体の結論としては、中国語についても「抽象概念の大部分はメタファーに基づいて理解される」という認知科学における主張の妥当性を裏付けるものであったが、これは単に従来の先行研究における見解に追従するだけのものではなく、英語・日本語と中国語の間に見られる概念化の差異についても随所で言及し、明らかにしている。一方で、丁寧に記述しようとするあまり、例えば第4章や第7章で扱われている「容器」の概念に関わる一連の問題などは、日本語の発想と似通っている中国語の表現例についても詳細な検証が行われており、そうした場合には、往々にして結論が予測できるという点で、やや斬新さを欠くものであった。

また、上記「本論文の概要」の記述からも明らかなように、各章において多くの概念が複数の階層にわたって細分化されており、分類を行うこと自体が本論の目的となっているような印象を受けるといった指摘が審査員から提起された。その導き出された区分についても、主に意味を根拠としているため、それらが唯一の枠組みであるといえるのかという疑念は払拭できない。こうした疑問は当該研究分野の性格上免れ得ない面があることは否定できないものの、統語的観点からの分析が主流を占める中国語文法研究において、認知メタファー理論の立場からの分析の有効性を示したという点に、本論文の価値を見出すことができる。加えて、本メタファー研究を通して、人間の思考のメカニズムを解明しようとする韓涛氏の強い意志が感じられる。本論文における研究成果を踏まえたうえで、当該分野における研究のさらなる進展および広がりが期待できるものである。

以上の評価に基づき、審査委員は全員一致して、本論文が博士学位論文として十分にその水準に達していると判断した。